

長野県松本市

*SOUZA*

# 惣社遺跡 I

——緊急発掘調査報告書——

**2002.3**

松本市教育委員会

# 例言

1. 本書は惣社遺跡の第1次緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は松本市下惣土地区画整理組合による、松本市下惣土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として実施した。発掘調査および報告書の作成は同組合より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、I-2：事務局、II-2：森義直、III-4：瀬久士、それ以外を澤柳秀利が行った。
4. 本書作成にあたっての作業分担は下記の通りである。

遺物洗浄：百瀬二子

図面整理：澤柳秀利

トレース：澤柳秀利

写真撮影：澤柳秀利・加島泰祐（遺構）、宮嶋洋一（遺物）

編集：澤柳秀利

5. 本書において用いた遺構などの略称以下の通りである。  
土坑：土、トレンチ：T
6. 本書において用いた方位記号は磁北を用いている。
7. 本調査で得られた遺物および調査の記録類はすべて松本市教育委員会が所有し、松本市立考古博物館が保管している。

松本市立考古博物館〒390-0823 長野県松本市大字中山3738番地1 Tel0263-86-4710 FAX0263-86-9189

# 目次

## 例言

## 目次

I	はじめに	3
1.	調査に至る経緯	3
2.	調査体制	3
II	遺跡の位置と環境	7
1.	惣社遺跡の位置	7
2.	惣社遺跡の地形・地質	8
III	周辺での試掘・立会い調査	10
IV	調査結果	11
1.	調査の概要	11
2.	検出遺構	11
3.	出土遺物	11
V	まとめ	13
写真図版	1	14
写真図版	2	15

## I はじめに

### 1. 調査に至る経緯

---

惣社遺跡の周辺は、古代には信濃国府が存在していたといわれ、現在もその正確な位置は不明ではあるが、推定地の一つとされているところである。現在までの調査では、その手がかりはつかめていない。今回この地区に、土地区画整理事業が計画されたため、松本市教育委員会では施工範囲内にある埋蔵文化財の保護について、松本市下惣土地区画整理組合と保護協議を行い、事前に試掘調査を実施したところ、古代の遺構・遺物を確認した。そのためふたたび保護協議を行い、試掘調査の結果遺構を確認した部分について本調査を行うこととなった。対象面積は、開発区域6.7haのうち、試掘調査の結果遺構を確認した部分を中心に541㎡とした。

### 2. 調査体制

---

**調査団長：**松本市教育長 竹淵公章

**調査担当者：**澤柳秀利、加島泰祐

**調査員：**松尾明恵、宮嶋洋一、森義直

**協力者：**荒木稔、飯田三男、石川光男、今村克、入山正男、岡村行夫、神田栄次、久保田登子、奥喜義、河野清司、小松正子、芝田とり子、清水陽子、下条ちか子、鈴木幸子、高橋登喜雄、竹内直美、田中一雄、寺嶋実、廣田早和子、福島勝、二木一男、布野行雄、布野和嘉夫、布山洋、洞沢文江、丸山喜和子、村山牧枝、百瀬二三子、八板千佳、山崎照友、渡邊順子

**事務局：**松本市教育委員会文化課

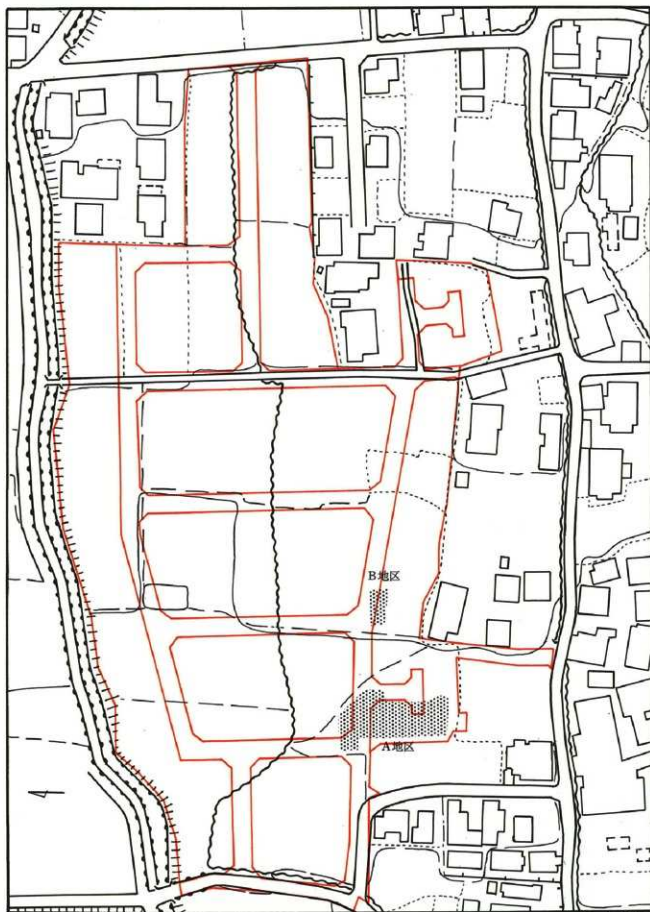
木下雅文（文化課長 ～13.3.31）有賀一誠（文化課長 13.4.1～）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（文化財担当係長）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、渡邊陽子（嘱託）、塚原祐一（同）



1:芝田遺跡、2:新島南夷遺跡、3:榑田遺跡、4:真観寺遺跡、5:飯沼河遺跡、6:大村遺跡、7:大輔原遺跡、8:大村古屋敷遺跡、9:大村立石遺跡  
 10:大村前田遺跡、11:塚田遺跡、12:惣社遺跡、13:横田遺跡、14:洞の宮遺跡、15:横田古屋敷遺跡、16:新井遺跡、17:宮北遺跡、18:下原遺跡  
 19:堀の内遺跡、20:女島羽川遺跡、21:四ツ谷遺跡、22:鬼川寺遺跡、23:荒町遺跡、24:針塚遺跡、25:黒町遺跡、26:北小松遺跡、27:松岡古墳  
 28:水沢(1~4)古墳、29:大屋敷(1,2)古墳、30:妙義山(1~3)古墳、31:横田館址、32:桃仙園古墳、33:御母家(1,2)古墳、34:国司塚古墳、  
 35:惣社車塚古墳 36:大塚古墳、37:針塚古墳、38:赤塚(1,2)古墳、39:北河原屋敷古墳 ●印：今回調査地

S = 1 : 15000

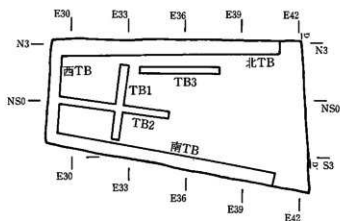
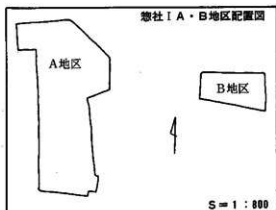
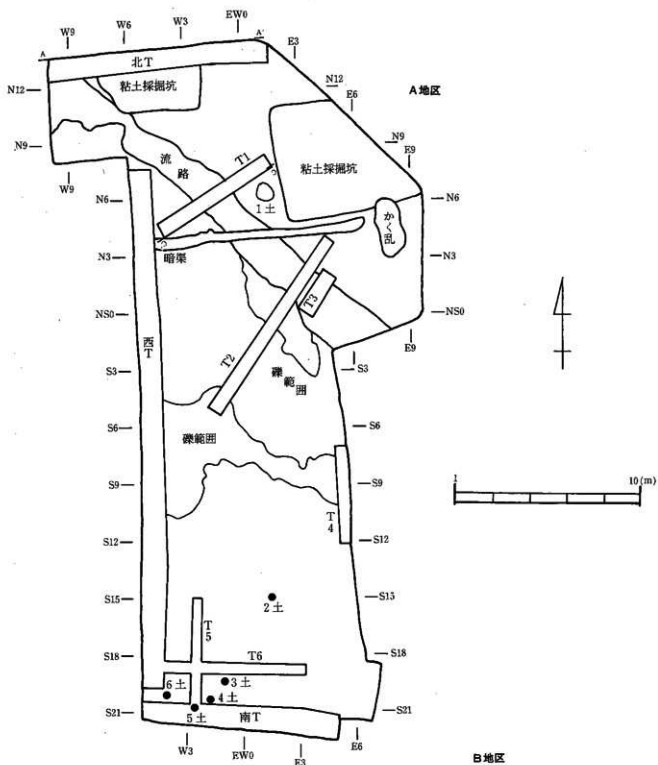
第1図 遺跡の範囲



網掛け部分：調査地

S = 1 : 1250

第 2 図 調査範囲



第3図 惣社遺跡遺構配置図

## II 遺跡の位置と環境

### 1 惣社遺跡の位置

惣社遺跡は、松本市の東部、里山辺地区藤井から流れる藤井沢の左岸である惣社北部、里山辺下金井にかけての広い範囲で、現況はそのほとんどが水田に利用されている。

この付近一帯は、かつて古代から中世にかけて、筑摩郡に存在したといわれる信濃国府の推定地が各所に点在し、また北西に隣接する大村では、古くから古代瓦が出土することから廃寺が存在したとされている地域である。しかし、昭和56年度から5次にわたる信濃国府確認調査(第1表)、また昭和61年以来行われている大村廃寺(大村遺跡)の調査によっても、いまだに両者ともその位置はつかめておらず、手がかりもほとんどないといった状況である。

惣社地籍においても、そのような経緯から調査が行われている。やはり国府関連の遺構・遺物は発見されていない。惣社遺跡の範囲内においても、後述のように試掘調査が実施されているところではある。しかし確認されているのは縄文時代の遺構・遺物が主であり、奈良・平安時代の遺構は少なく、特に官衙に関するものは遺構・遺物ともに全く確認されていない。

今回、惣社遺跡内のこの地に、下惣社地区面整理事業が計画された。該当範囲のすぐ西側の宅地造成においては、それに先立つ試掘調査の結果、縄文時代中期の住居址・土器が出土している。このことから隣接する今回調査地においても縄文時代から古代にかけての集落の存在は十分考えられることから、本調査に先立って試掘調査を実施したところ、若干の遺物・遺構を確認することができた。

第1表 推定信濃国府確認調査一覧表

調査 年度	調査 区画	調査地名	主な検出遺物	主な出土遺物	その検出経緯
1	821011 ～821205 報告書No.28	大字惣社600 (農林水産省惣社第3桑園)	竪穴住居址4(平安) 土坑5、ピット10 溝群と溝1	弥生土器2点 土師器・須恵器 灰釉陶器・陶磁器	周辺での7箇所を試掘調査では、 若干の遺物出土にとどまる。
2	831024 ～831109 報告書No.33	大字惣社600 (農林水産省惣社第3桑園) 第1次地点の50m北寄り	竪穴住居址2(平安) ピット20、溝1	土師器・須恵器 灰釉陶器・中世陶器 鉄製品	溝は、コの字型を呈する。 遺構はいずれも平安時代後期
3	841011 ～850303 報告書No.37	A: 大字里山辺1677-1他3筆 B: 大字里山辺1562-イ C: 大字里山辺1413 D: 大字里山辺3325-1 (山辺中学校)	A～C: 遺構なし D: 竪穴住居址1 (古墳)	A～C、縄文土器 土師器・須恵器 D、土師器	D地点で1軒古墳時代の住居址 を検出したのみ、国府に関連する 遺構・遺物はみられなかった。
4	850706 ～851219 報告書No.42	A: 大字里山辺3326 (山辺中学校体育館) B: 横田1丁目21番128-1他	A: 竪穴住居址1 (古墳) B: 遺構なし	A、土師器 B、土師器・須恵器 近世陶磁器	A地点で1軒古墳時代の住居址 を検出したのみ、国府に関連する 遺構・遺物はみられなかった。
5	861020 ～861108 報告書No.56	大字西浅間609	竪穴住居址5 (平安3、古墳2) 孤立柱建物址1 ピット2	縄文土器・土師器 須恵器・灰釉陶器 陶磁器	古墳～平安の住居址5軒を検出 したが、国府に関連する遺構・ 遺物はみられなかった。

## 2 惣社遺跡の地形・地質

### 調査地点の立地

本惣社の調査地は松本盆地中央の東端、松本市街地が東部の筑摩山地と接する山麓付近で、女鳥羽川扇状地の東縁と薄川扇状地の北縁との接点付近の標高613～615mにあり西側に緩く傾斜している。

調査地付近は薄川扇状地に筑摩山地の山麓近くから流出する海岸寺沢、追倉沢、藤井沢などによる崖錐性堆積を載せている。三つの沢のうち、前の二つは調査地点の上流1200mで合して調査地の約200m南を西流している。藤井沢のみその左岸が調査区と接して西流し、下流約200mで前者と合流して湯川となり、市街地の清水地区で女鳥羽川と合流する。この湯川付近で女鳥羽川扇状地と薄川扇状地が接し複合扇状地を形成している。

### 周辺の地形・地質

本調査地を含む松本盆地は、洪積世中期に起きた造盆地運動で誕生した構造性の盆地で、糸魚川～静岡構造線とほぼ平行に東・西の山麓線沿いの大断層と、それを横切る東西方向の断層により生じた南北に長い盆地であり、西と南は飛騨山地の中・古生層とそれに貫入した火成岩類よりなっている。東部～東北部は2000m～1000mのほぼ南北に連なる筑摩山地で、第三紀層とそこに貫入や噴出した火成岩類よりなっている。

調査地と関係のある盆地の南半分を占める主な堆積物は、飛騨山地を開析し西南方向に流入する梓川による広大な扇状地堆積物と南西部山地から盆地に流入する額川・奈良井川・田川などによる扇状地堆積物であり、これ等が合して複合扇状地を形成し、緩く東北東に傾斜している。

梓川系の砂礫層の東端は、本調査地の近く、清水付近まで到達していることがボーリングの結果判明している。

一度誕生した盆地も、その後の東部、松本市の旧市街地付近が洪積世後期に局部的な構造（断層）性盆地の形成が始まり、同時にその西部が傾動しながら隆起をはじめ、それまで大口沢方面に流れていた女鳥羽川が城山方面に流れをかえ、砂礫を第三紀層の上に乗せ更に隆起の進行により、そこは城山となり、流路は東へ押しやられて右岸に三段の段丘面を形成し現在に至っている。第三段目は現市街地で氾濫原でもあるので、女鳥羽川の流路の首振りにより平安時代頃は岡田町の西を流れていたことが、先年の岡田町の発掘で判明している。

この松本市街地の局部的盆地を埋める堆積物の主役を果たしたのは、女鳥羽川と薄川の扇状地堆積物である。

女鳥羽川は三才山峠(1500m)から流れ出す本沢を始め幾つもの沢と合して西に向かって流れ、稲倉付近で流れを南にかえ、流路の首振りにより稲倉を扇頂として南に広がる扇状地を形成している。

一方薄川は市街地の東部、三峰山や岸畔付近を源流として幾つかの沢と合流して西流し、入山辺地区の西端付近を扇頂とする西に広がる扇状地を形成している。

この両者は調査地付近の湯川で接し、松本市街地方面に複合扇状地を形成している。

本調査地は両扇状地の接点の最高位にあり、しかも、二次的にできた上記局部的盆地の東端にあるため、この局部的盆地は沈降による沼地の時代があり、その影響を引き継ぎ停滞水地特有のヨシやアシやガマなど湿地性植物の腐食に富む漆黒色の粘土層が広く分布し、地下水位も高い。

現在薄川は扇状地の南端にまで首を振り、調査地点からは遠いが、上記三つの崖錐性の堆積物が調査地点付近の薄川扇状地に載り、西側に緩く傾斜している。

### 調査地点の地形・地質

調査地点は複合扇状地の最初の接点で、市街地の平坦部への移行際であり、全体として緩く西に傾斜して



いる。北側は藤井沢の左岸に接し、やや低く厚さ160cm程の黒色粘土層で、その下は礫層となっている(第4図B参照)。この黒色粘土層は大村方面に広く堆積しており、不透水層の働きをしている。尚この粘土は近年まで瓦の製造に使われ、調査地からも掘られた跡が見られる。

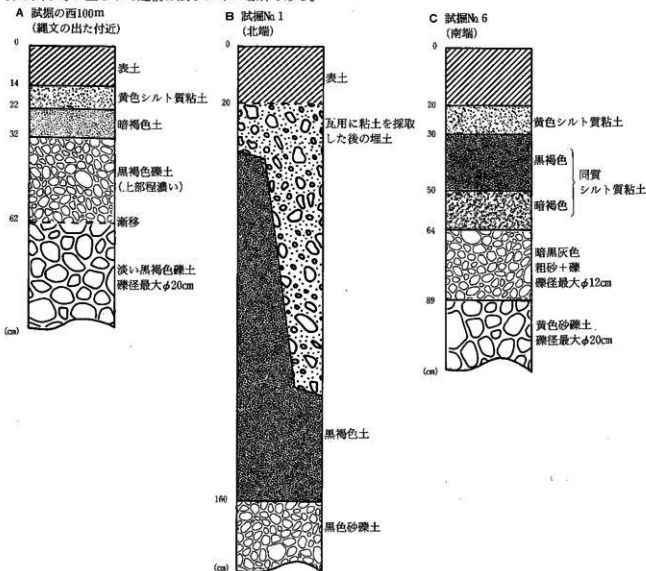
調査地の南側程微高地となっており、これは里山辺で合流し海岸寺沢と追倉沢の崖錐性亜角礫層や、そこから小流や雨水で洗い出されたシルト層や粘土層、それにやや安定期には腐食土層が幾重にも重なっている。

これ等の堆積物のうち珩岩や石英斑岩などは風化しにくい、第三紀層や安山岩などは風化しやすく粘土化し易い特徴がある。黒色粘土層は部分的には沢の堆積物で覆われているが、地表又は地表近くに広く分布している。一方市街地を覆っている薄川・女鳥羽川の複合扇状地の下層にも十数m~三十mの間に何層もの粘土層の存在が過去のボーリングの結果知られている。

調査地一帯を簡単にまとめれば、両河川共旧市街地の沈下につれ、湿地性粘土堆積→流路が近づけば扇状地、堆積物→流路が遠ざかればふたたび湿地性粘土堆積物…このような状態が繰り返し起きていたものとみられる。

調査地では湿地性粘土堆積物と薄川扇状地堆積物の繰り返しの外に、前記の、近くにあった三つの沢による崖錐性堆積物が押し出しており、第4図AやCに示すように複雑な堆積層を形成している。

結論としてこの付近は、縄文時代に生活が営まれていたとしても、薄川の流路の首振りや沢からの洪水の押し出し等が重なって遺構は残りにくい場所である。



第4図 惣社遺跡内試掘地点における土層柱状図

### Ⅲ 周辺での試掘・立会い調査及び調査

惣社遺跡は、先述のように信濃国府の存在と深い関係があるとみられている地区ではあるが、周辺での5次にわたる確認調査によっては、今のところそれに関連するとみられる遺構・遺物は確認されていない。今回調査地の周辺では、開発行為にともない、数回の試掘調査が実施されている。それらのうち、惣社遺跡の範囲内では、第2表に示した通り4回の試掘調査により、遺構・遺物が確認されている。

1の平成8年度に実施した地点は、今回調査区の南100mの惣社集落内にあたる。この付近では、藤井沢の影響は少なく、安定した茶褐色土の地山に、暗褐色土の覆土をもつ土坑などの掘り込みが検出されている。また、遺物も土師器、縄文土器が出土している。

2の平成10年4月に実施した地点は、調査区の東南東250mで、下金井集落の北側にあたる。ここではトレンチを5本設定し、そのうち1本から、住居址らしき遺構が検出され、土器片も出土している。

3の平成10年4月に実施した地点は、今回調査地西側120mにあたる宅地造成に伴うもので、藤井沢の影響を受けながらも縄文時代中期とみられる住居址を確認した。

4の平成12年度の試掘は、本調査に伴うもので、開発範囲6.7ha内にトレンチを24本設定した。その結果藤井沢に近い部分では、藤井沢の影響を強く受け、その堆積による非常に厚い粘土層がみられ、人間の居住できる環境ではないことがわかった。南に行くにしたがってこの粘土層は薄くなっていき、その下層の礫層には土坑などの掘り込みもみられた。

このほかにも、惣社、惣社宮北、新井遺跡の近接地として、今回調査地の南510mの里山辺1393番地他では、試掘調査の結果古墳時代の住居址・土坑などが確認され、当該期の遺物を得ている。この部分は、それまでは遺跡の範囲外という位置付けであったが、これによって惣社宮北遺跡の範囲は東に広がった。この結果も、惣社集落内に古代の集落が存在していたことを裏付ける資料となっている。同じく宮北遺跡内での試掘調査(惣社419番地3)では、遺物はみられないが、ピットが1個確認されている。

また平成2年度には、今回調査地の北西200m、藤井沢を挟んだ対岸にある大村塚田遺跡の調査が行われ、ここでは縄文時代中期後葉の住居址が46軒、弥生時代後期の住居址が1軒という集落が発見されている。遺物の量も多く、整理用コンテナボックスで100箱を数えている。ここは藤井沢の影響を今回調査地ほど受けておらず、沖積地としては非常に良好な状態で遺構・遺物が確認された遺跡である。

以上のように、惣社近辺では多くの試掘調査が行われているが、まだ不明な点が多い場所ではある。

第2表 惣社遺跡内試掘調査一覧表

No.	調査地点	調査期間	遺構	遺物	時期	備考
1	惣社351	19961210 ～19961212	土坑、 ピット	土師器・ 縄文土器	縄文、 奈良・平安	
2	里山辺1196-1他	19990405 ～19990413	住居址か	縄文土器	縄文時代中期	
3	惣社277-1他	19990422 ～19990424	住居址1軒	縄文土器	縄文時代中期	今回調査地の西隣隣接地
4	里山辺1246-2 惣社338-1他	20001109 ～20001128	土坑	土師器	奈良・平安	今回調査の試掘

## IV 調査結果

今回の調査では、試掘調査の結果遺構・遺物を確認した開発区域西部部分を中心にA地区、その東側の微高地状に一段高い部分にB地区と、合わせて2ヶ所の調査区を設定した。遺構は、A地区で土坑6基及び自然流路が検出された。その他には近世以降の瓦用粘土探掘坑、暗渠排水が確認された。B地区では遺構を検出することはできなかった。遺物は、A地区では縄文～平安時代の土器・陶器、黒曜石片が、B地区では縄文時代の土器、黒曜石片が出土している。

### 1 遺構

今回の調査で検出した遺構は、土坑6基、流路1条である。

1土は、本調査に先立つ試掘調査の段階で確認している。掘り込みは浅いが、明らかに暗褐色土面に掘り込まれ、出土遺物は土師器の不明品片が1点と少ないが、古代の遺構であると考えられる。

2～6土は、いずれも茶褐色粘質土層下の礫面に掘り込まれている。礫面への掘り込みのため、検出は容易であったが、いずれも掘り方は浅く、遺物の量も少ない。用途について明らかなものはなかった。

流路は、基本的には南東から北西に向かって流れていたものとみられ、幅はおおむね200cm前後、深さは30cm前後でほぼ一定している。断面形は皿型を呈している。中からは、若干の縄文土器片、黒曜石片が出土している。

第3表 惣社遺跡1土坑一覧表

No.	検出面	規模 (cm)			平面形	断面形	時期	備 考
		長軸	短軸	深さ				
1	1	103	81	17	不整形	皿型	古代	試掘調査により確認
2	2	70	—	18	円形	半円形	縄文	断面図のみ
3	2	41	—	12	円形	皿型	縄文	断面図のみ
4	2	—	—	—	円形	—	縄文	実測図なし
5	2	48	—	15	円形	皿型	縄文	断面図のみ
6	2	63	—	20	円形	半円形	縄文	断面図のみ

### 2 遺物

#### (1) 土器

今回の調査では、縄文土器、土師器、須恵器が出土している。いずれも磨耗し、小破片である。

縄文土器は、遺構からの出土品はなく、すべて検出面或いはトレンチ調査の結果によるものである。いずれも磨耗が激しく、文様などもほとんど残っていない。また小破片であることから器種を特定することは困難であるが、一部深鉢の底部とみられる破片もある。実測図或いは拓影を掲載できるものはないため、その中でも比較的大きな破片を写真図版として掲載した(写真図版1-1～3)。土器の時期について、詳細については不明な点も多いが、縄文時代中期後半のものが多くみられ、一部後期まで下る可能性のあるものもみられる。

古代の土器は、土師器、須恵器がみられる。土師器は、1土からのもののみであり、杯または椀の体部ではないかとみられる。須恵器は、いずれも検出面からのもので、遺構に伴うものはない。大型の甕の破片とみられるもの他は、小破片で器種を特定できるものはない。いずれも図示することができないため、写真図版として掲げた(写真図版1-4)。

(2) 石器

① 石器群の概要 (第4表参照)

惣社遺跡一次調査では42点の石器が回収された。現場段階で出土した石器群のほとんどが回収されたようだが、出土遺構の判明している個体は3点、出土地点の三次元座標が記録されている個体は1点のみである。また、接合・母岩識別作業の結果、接合資料・同一母岩資料ともに確認できず、本調査区での石器群の共時的・通時的分析はできなかった。

② 石材概観 (第8、9表参照)

21点の黒耀岩が総回収個体数の半数を占め、ついで10%を超えるものに溶質凝灰岩6点、安山岩5点があり、その他はチャート3点、礫質砂岩2点、凝灰岩2点、石英閃緑岩1点、硬砂岩1点、珪質頁岩1点である。

③ 器種概観<sup>註1</sup> (第8、10表参照)

主なものとして、自然為による剥落と考えられる礫片12点、剥片9点がある。その他の内分けは石核4点(9.5%)、微細剥離痕ある剥片4点、楔状剥片2点(4.8%)、二次加工ある剥片2点、原石2点、礫2点、礫石器3類2点、楔状石核1点(2.4%)、礫片2類1点、礫石器複合1点である。

[補註]

註1 本項で用いた器種名は「関の宮遺跡Ⅰ」(大田 2001)での仮設定義を用いたので、参照されたい。

[主要引用・参考文献]

- 太田圭郎 1998 「②石器・石製品」『復元遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』松本市教育委員会 pp.75-105  
 太田圭郎 2000 「4石器」『宇瀬遺跡Ⅱ』松本市教育委員会 pp.93-122  
 太田圭郎 2001 「3石器」『関の宮遺跡Ⅰ』松本市教育委員会 pp.25-29  
 加島泰祐 2001 「B石器」『平田北遺跡VI』松本市教育委員会 pp.18-19

総回収個体数	42	単独率	100.0%
接合個体数	0	接合率	0%
同一母岩個体数	0	同一母岩率	0%
母岩識別資料個体数	0	母岩識別率	0%
母岩数(接合資料母岩数)	0	平均接合個体数	0%
自然礫(非接合対象個体)	7	自然礫含有率	16.7%
三次元座標記録総個体数	1	三次元座標記録率	2.4%
遺構母風値体数	3	遺構母風値率	7.1%

第4表 主要諸元一覧

器種略号	器種名
MS	原石
C	石核
F	剥片
BC	楔状石核
BF	楔状剥片
RF	二次加工ある剥片
MF	微細剥離痕ある剥片
P	礫
PT	礫片
PT2	礫片2類
P3	礫石3類
PC	礫石器複合

第5表 器種略号一覧

遺構略号	遺構名
SB	住居址
SC	植物性
SD	溝状遺構
SK	土坑
SF	ピット
SV	谷状地形
SX	不明
TG	グリッド
TK	検出面
TT	トレンチ
TY	埴土
TZ	試掘

第6表 遺構略号一覧

石材略号	石材名
Ob	黒耀岩
An	安山岩
CrAs	溶質凝灰岩
QuDi	石英閃緑岩
CoSa	礫質砂岩
HSa	硬砂岩
SiSh	珪質頁岩
Tu	凝灰岩
Ch	チャート

第7表 石材略号一覧

石材略号	MS	C	F	BC	BF	RF	MF	P	PT	PT2	P3	PC	計	接合個体数	接合率
Ob	2	2	8	1	2	2	4						21	0	0%
An								2	1	2			5	0	0%
CrAs							2	4					6	0	0%
QuDi											1	1	0	0	0%
CoSa								2					2	0	0%
HSa								1					1	0	0%
SiSh		1											1	0	0%
Tu								2					2	0	0%
Ch		1	1					1					3	0	0%
計	2	4	9	1	2	2	4	2	12	1	2	1	42	0	0%

第8表 石材単位器種組成

出土遺構Ⅰ	Ob	An	CrAs	QuDi	CoSa	HSa	SiSh	Tu	Ch	計
SK1	3									3
SV	2							1		3
TG		2								3
TK	9	1	5	1	1			1	1	19
TT	7	2	1		1	1	1	1	1	14
計	21	5	6	1	2	1	1	2	3	42

第9表 遺構単位石材組成

出土遺構Ⅰ	MS	C	F	BC	BF	RF	MF	P	PT	PT2	P3	PC	計
SK1	1										2		3
SV	1	1	1										3
TG													0
TK			5	1	1	1	2	2	5		1	1	19
TT	1	2	3		1	1	1		5		1	1	14
計	2	4	9	1	2	2	4	2	12	1	2	1	42

第10表 遺構単位器種組成

## V まとめ

今回の調査によって、この周辺が藤井沢或いは薄川の氾濫を強く受けた場所であるということが分かった。特に藤井沢に近い北側部分については、表土の下には厚い粘土層が堆積し、人間の住み得る環境ではなかったことが事前の試掘調査によって確認されている。南に行くにしたがってこの粘土層は薄くなっていく。この粘土層は、近代以前において、瓦の原材料として用いられ、調査区内においても、2ヶ所の粘土採掘坑を検出している。その上面には黒色系統の粘質土が堆積しているのがわかった。当初はその土層内には遺物が含まれることから遺構の覆土或いは包含層と考えたが、調査区全体に広がることから、その面は生活面と考えることとし、結果的に土坑・流路を確認した第1面と捉えることとなった。全体的に遺構の密度は、今回調査区においてはかなり低いとみられ、事実確認された近世以前の遺構は土坑1基にとどまっている。ただ、土層観察のために設定したトレンチからは、断面として幾つかのピット・土坑は確認されているため、集落などの中心部ではないが、古代において、人間が残した何らかの痕跡は確認されているわけである。

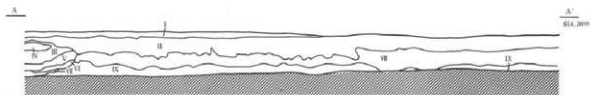
その下層には砂礫層が厚く堆積している。構成する礫について観察したところ、薄川系統の礫であることがわかった。II-2で述べた通り、今回調査区は薄川扇状地上にあり、その影響は強く受けてきたところであるとみられる。その礫層の上にはわずかな厚さの茶褐色土が堆積しているのが確認できた。調査区の南部において、礫層に掘り込まれていたピットからは、縄文時代のもつとみられる黒曜石片が若干量出土している。おそらくは上面の茶褐色土から掘り込まれたものと考えられ、茶褐色土層は包含層であるといえ、この層からは縄文土器片、黒曜石片が出土している。この上流方向である東南東側およそ250mの地点において、試掘調査の結果1軒の縄文時代中期とみられる住居址が捉えられているため、そのあたりに集落が存在し、そこからの流れ込みなどによって入り込んだものであると考えるのが妥当かもしれない。

IIIでも述べたが、今回調査地の北西200mでは、大村塚田遺跡が調査され、縄文時代中期後葉の大規模な集落が確認されている。今回調査地とそれほど大差は感じられない沖積地ではあるが、集落が展開していたわけである。IIIで述べた平成10年度試掘の3は、その続きなのであろうか、縄文時代中期の土器を出土する住居址が確認されているわけである。しかし、藤井沢に加え、薄川の影響が強い今回の調査地付近では、集落はあまり発達しなかったか、或いは流失してしまったのかも知れない。

以上、今回の調査についてまとめてみたが、遺構・遺物ともにその量は極めて少なく、この調査のみからこの遺跡の性格について論ずることは困難である。しかし、この周辺には、まだ未調査の部分が多く、今後の調査の成果によって明らかになっていくことと思う。

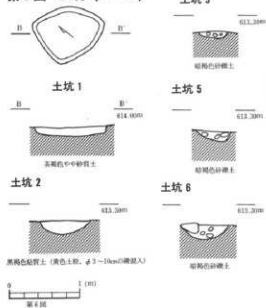
最後になりましたが、本調査に際しては多大なるご協力をいただいた松本市下惣土地区画整理組合の皆様、地元関係者の皆様、また厳寒期にもかかわらず、現場作業に従事していただいた皆様方に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

第5図 A地区北壁土層

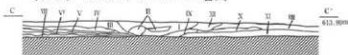


- I: 灰黄色 (粘土含むシルト、フレイト上面は礫作土)  
 II: 灰黄色 (礫が混入し、明瞭な土を呈す、φ10~20mm礫2%、φ3cm以下の風化火山岩礫3%、炭酸鈣、粘土含むシルト)  
 III: フォーテ黄褐色 (砂を含むシルト、φ10~20mm礫9%部砂が混入している)  
 IV: フォーテ黄褐色 (φ10~100mm礫5%)  
 V: 灰黄色 (粘土含むシルト、φ3cmの風化火山岩礫2%)  
 VI: 暗褐色灰土 (粘土)  
 VII: 暗褐色灰土 (シルト含む粘土、φ10~10mm以下の礫30%)  
 VIII: 黄褐色 (粘土を含むシルト、φ2~5mm以下の礫1%、風化火山岩礫5%、φ10~30mm礫3%) (遺物を含む)  
 IX: 黄褐色土 (砂・粘土含むシルト、φ3~20mmの風化火山岩礫30%、風化火山岩土を呈す)

第6図 土坑 (1~6)

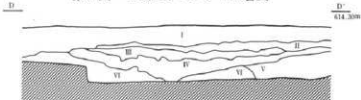


第7図 A地区トレンチ1土層図

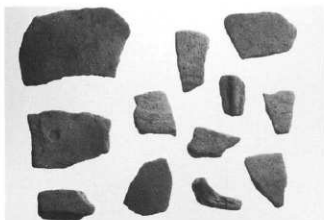


- I: 黄褐色土 (シルト、φ5cm以下風化火山岩礫7%)  
 II: 黄褐色土 (砂を含むシルト、φ5~20mm礫30%)  
 III: 黄褐色土 (砂・粘土含むシルト、φ2cm以下風化火山岩礫1%)  
 IV: 灰黄色 (粘土含むシルト、φ2~5mm風化火山岩礫1%、φ3cm地土1%以下)  
 V: 灰黄色土 (粘土含むシルト、φ3cm以下礫1%)  
 VI: 黄褐色土 (シルト、炭酸鈣多量)  
 VII: 暗褐色土 (粘土、φ2~3cm風化火山岩礫2%)  
 VIII: 灰黄色土 (粘土、砂を含むシルト、炭酸鈣多量)  
 IX: 灰黄色土 (粘土、φ2~3cm風化火山岩礫5%)  
 X: 灰黄色土 (砂を含むシルト、φ3~5cm風化火山岩礫10%、炭酸鈣あり)  
 XI: 灰黄色土 (シルト、φ3cm以下の礫1%以下)  
 XII: 灰黄色土 (砂を含むシルト、炭酸鈣あり)

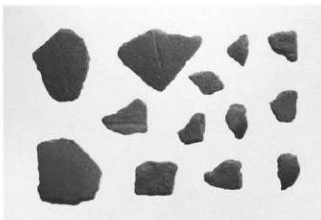
第8図 A地区トレンチ1土層図



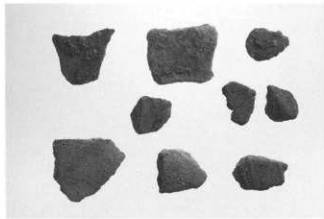
- I: 灰黄色 (礫が混入し、明瞭な土を呈す、φ10~20mm礫2%、φ3cm以下風化火山岩礫3%、炭酸鈣、粘土含むシルト)  
 II: 灰黄色土 (粘土・砂を含むシルト、φ2~5cm風化火山岩礫2%)  
 III: 灰黄色土 (粘土) 含む砂、わずかに炭酸鈣  
 IV: 灰黄色土 (粘土、φ2~3cmの風化火山岩礫3%)  
 V: 黄褐色土 (粘土含むシルト、φ10mm礫7%)  
 VI: 灰色土 (粘土含むシルト、φ3~10mm礫1%、炭酸鈣あり)



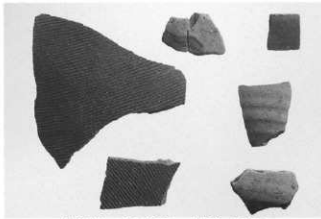
惣社遺跡1出土土器(1) 縄文土器



惣社遺跡1出土土器(2) 縄文土器



惣社遺跡1出土土器(3) 縄文土器



惣社遺跡1出土土器(4) 土器器・須恵器

図版1 惣社遺跡1遺物



調査開始前 (西から)



作業風景 (南から)



流路1断面 (南東から)



土層堆積状況 (調査区西壁)



A地区第1面全景 (南から)



B地区トレンチ内掘出土状況 (東から)



A地区2面土坑2~8 (東から)



第2号土坑完掘状況 (西から)

図版2 惣社遺跡1遺構

惣社遺跡第1次発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし そうざいせき きんきゅうはくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 惣社遺跡Ⅰ 緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No159							
編著者名	澤柳秀利・懸久士							
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 （記録・資料保管：松本市立考古博物館・〒390-0823 松本市中山3738-1・TEL.0263-86-4710）							
発行年月日	平成14年（2002）年3月22日（平成13年度）							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
惣社	長野県 松本市	20202	78	36度 14分 34秒	137度 59分 46秒	20010109～ 20010214	541.7	松本市下惣土地区画整 理事業
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落址	縄文  平安	土坑	5基  1基	縄文土器  土師器・須恵器	河川の影響を強く受け、 集落の外れにあたる場所 であることが明らかにな った。		

松本市文化財調査報告 No159

長野県松本市

惣社遺跡Ⅰ

— 緊急発掘調査報告書 —

発行日 平成14年3月22日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 藤原印刷株式会社